

Title	「アクティブラーニング」共同研究のはじめに：「大学改革セミナー」報告とともに
Author(s)	齊藤, 伸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.1, 2013.9 : 8-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4596
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「アクティブラーニング」共同研究のはじめに —「大学改革セミナー」報告とともに—

齊藤 伸

はじめに：アクティブラーニングとは何か

聖学院大学総合研究所における新たな共同研究として本年度より「アクティブラーニングの教育方法研究」が開始される。本研究は、大学に導入されているアクティブラーニングの教育方法と教育効果とを明らかにすることを目的としている。日本経済団体連合会は、既に2006年には主体的なキャリア形成の必要性を主張しており、自ら主体的に考えて行動することができる人間、すなわち「自律型人材」が社会に求められている¹⁾。そうしたなかで、アクティブラーニング研究の先駆者である京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一氏は2007年の報告のなかで、ポストモダンの教育というコンテクストからアクティブラーニングが必然的に要請される理由を明快に述べている。それによると、「社会のあまりにはよい進展に、その文化継承の役割を担うはずの学校教育が、カリキュラム、教師のもつ知識など、さまざまな側面においてついていっていない²⁾。このような社会的背景に鑑みて、学校教育が単に受動的な「教授」の枠組みを超えて、学生自身による主体的な学び、すなわちアクティブラーニングによって広く展開されるべきものとなったのは必然的な帰結であったと溝上氏は論じている。では、この「アクティブラーニング」とは何かを最近の研究成果を参照しつつ簡略に述べておきたい。

文科省の用語解説によると、それは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」とされている。しかしながら、そもそも「アクティブラーニングとは何か」、という問いに対する統一的な解答は存在しないと言うべきであろう。その名称が示しているように、それが何らかの「能動的な内容」を含む学修方法であることについては誰しもが一致してはいる。しかしながら、「アク

ティブ・能動的」という言葉がどの範囲にまで適用され得るのかは、それぞれに解釈が分かれるところである。そのため「アクティブラーニング」を扱う文献では、第一にその定義付けから始めることが多いようである。たとえば、2011年の河合塾による報告では「授業者が一方向的に知識を伝達する講義スタイルではなく、課題研究やPBL、ディスカッション、プレゼンテーションなど学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称する用語³⁾とされている。これは上述した文科省による定義とほぼ一致している。しかしながら、溝上氏による最近の報告では、さらにそれを拡大して次のように定義されている。すなわち、「授業者からの一方通行的な知識伝達型授業をAと置いたときに、それを乗り越えていく〈Not A〉の、能動的な活動が含まれるものは、すべてアクティブラーニングである⁴⁾と。そのため、このアクティブラーニングというものは、それぞれの大学が何らかの努力や工夫によって、旧来型の授業を乗り越えるものとも解することができるのであって、それらはまったく一樣なものではあり得ない。したがってこの一義的な解釈を許さないものを本学に導入するにあたっては、本学の学生に相応しいそのあり方を模索することが求められるのであり、つまり「聖学院大学におけるアクティブラーニングとは何か」という問いが本共同研究最大の命題となるであろう。

ところで本共同研究を開始するにあたって、筆者はこの「アクティブラーニング」という内外を見ても比較的新しい研究領域に初めて触れることとなった。そこで、この領域の先行研究・先行事例を調査するために4月に東京で開催された「大学改革セミナー」に参加することとした。本来であれば稿を改めて報告すべきものであろうが、筆者による本研究の出発点として連続した内容となっているため、本稿の一部として発表させて頂

くこととした。それに伴って、「研究ノート」としては通常あるべきものより多くの紙幅を割かざるを得ないことをここでお詫びしたい。

「大学改革セミナー」報告

2013年4月24日、「主体的な学びの実現に向けて〈アクティブラーニングの現状と課題〉」と題するセミナーが株式会社内田洋行ユビキタス共創広場CANVAS（東京都中央区）において開催された。このセミナーは上述した企業によるICTデザインの事例紹介を含む3つの内容から構成されており、第1のセミナーでは慶應義塾大学の伊藤健二氏が講演し、第3のセミナーにおいては共愛学園前橋国際大学の森昭生氏の講演がなされた。本報告では、両セミナーの講演者による主要な主張および論点を要約し、それらに対する所見を述べることにしたい。

第1のセミナーでは、伊藤氏が「〈大学改革実行プランにおける主体的な学び〉のための学習環境（アクティブラーニングの整備にむけて）」と題し、5つのテーマに関して講演がなされた。それらは順に1. 背景：学士課程教育の実質化におけるアクティブラーニング。2. 「キャリア教育」におけるアクティブラーニング。3. 「実社会とのつながり」を意識したアクティブラーニング。4. 地域課題解決のためのアクティブラーニング。5. 卒業生1万人調査の結果に基づく再チャレンジの可能性、である。それぞれのテーマを貫く伊藤氏の主な考え方は、教育が「学生のモチベーションを喚起」すること、そして大学が「社会で求められる大学」であることの二点であり、それらを可能にするものがアクティブラーニングの実践であるという。伊藤氏によれば、学士課程期におけるアクティブラーニングの定着の有無は、学生のその後の人生を大きく左右する要素となり得るのであって、それは進路希望合致度、職場への満足度、転職率、離職率、平均年収など、卒業後の生き方にさまざまなかたちで影響を与えていることが統計によ

て裏付けられている。

また、伊藤氏はアクティブラーニングが展開する過程を次の8段階に区分して理解している。すなわち、①受動的学習による共通知識の獲得。②学習履歴に基づくフィードバック（ふりかえり）。③受動的学習で獲得した知識を用いたコミュニケーション。④コミュニケーションにおける気づき（満足度）。⑤コミュニケーションによる共通コンセンサスを図ったプラン・企画・仮説立案。⑥プラン作成における矛盾等の気づき。⑦プランに沿った関係者での行動・実行（実験）。⑧実行中・実行後における評価（満足度）・気づき。ここでの①～④は「学習課題」の段階、そして⑤～⑧は「業務課題」の段階となっており、それらに取り組むためには両者のあいだで異なる動機付けが必要とされる。そのため講演者は、学習への動機付けとしてのラーニングモチベーション（①～④）を、自身の取り組むべき課題へと主体的に向かわせる動機付け、すなわちワーキングモチベーション（⑤～⑧）へと連携させることの重要性を指摘する。このようなアクティブラーニングの段階的なプロセスを概念図として把握し、それを基にしてカリキュラムそのものを有機的な連関の下に構築することが重要である。本セミナーは、現代の日本におけるアクティブラーニングの意義を多くの統計的な資料から跡付けているため、それに強い説得力をもたせるものであった。伊藤氏が行ったさらなる統計資料が発表されるのを待ちたい。

第3のセミナーでは共愛学園前橋国際大学での実践に基づいて、同大学の副学長である森氏より「アクティブラーニングが生まれる文化と空間——〈ちょっと大変だけれど実力がつく大学〉の現場から」という講演が行われた。本講演についての感想を結論として最初に述べるとすれば、それは本学がアクティブラーニングを導入していくにあたって、参照すべき有意義な成功事例として傾聴に値するであろう⁵。共愛学園は1888年に前橋英和女学校として設立され、現在では保育園から

大学までを学園として設置している（小学校を除く）。共愛学園前橋国際大学は、1999年に女子短大から四年生へと移行した比較的新しい大学である。同大学は国際社会学部国際社会学科のみの単科大学であり、入学定員225名という小規模でありながらも、2004年度以降、常に募集定員を上回る入学者数を保つことによって年々学生数が増加し、現在では過去最大の在籍者数を抱えているという特異な大学である。代々木ゼミナール発表によるいわゆる「偏差値」は、開学当時46であったが、2013年度では51にまで上昇し、さらに文科省の「グローバル人材育成推進事業」等に採択されるなど、外部からの評価も高まってきているようである。また、講演者は単なる応募者数の増加のみならず、63%という同大学を第一志望で入学する学生の割合の多さの意義をも指摘している。ちなみに、聖学院大学への第一志望での入学者の割合は2012年度調べで50%である（第二志望学科への入学者も含む）。そのため、当初より学ぶ意欲を高くもった学生が多いようである。言うまでもなく、ここで応募者を惹きつけている要素がアクティブラーニングであって、同学園では「ちょっと大変だけれど実力がつく大学」というキャッチコピーの下で募集を行っている。学内の調査によれば、実際に学生が入学してから「力がついた」という実感は、1学年終了時で63% 卒業時には85%もの学生が、そのように感じているようである。この「実感」がその後の彼らの人生において大きな自信となるだろうことは明らかで、アクティブラーニングは学習面のみならず、精神的な成長にも寄与すると講演者は言う。

また、本学と共愛学園では、両大学が対象とする学問・教育領域の多くが重なっている。共愛学園は単科大学でありながらも、英語コース、国際コース、情報・経営コース、心理・人間文化コース、児童教育コースを設置しており、さらに特筆すべきは8つの教職課程までもが設けられている点である⁶。確かに本学と共愛学園とでは大学としての

規模の大小が異なることは言うまでもないが、それが量的な違いであって質的な違いではないとすれば、私たちがそこから学び得るものが存するのではないだろうか。そのため同大学における実践報告は、今後さらに詳しく検討することとしたい。

報告の締めくくりとして、セミナー全体を通しての感想を述べておきたい。本セミナーは定員100名であったが、当日は満席状態であった。主催者側によると、北は北海道から南は九州まで、幅広い大学からの参加があった。そうした単純な事実からしても、多くの大学でアクティブラーニングを導入するための努力がなされていることがうかがえる。セミナーを主催した企業などは、大学での学修における空間的な充実を提供するものであるが、大学の側にはそうしたものを可能な限り効果的なしかたで実践に採り入れる方法論、カリキュラムの開拓が求められていると言えよう。そのためには今後ともこの分野における先駆者たちの研究成果を十分に参照しつつ、それらを応用していく必要があるだろう。

おわりに：「入ってから伸びる大学」として

最後に、本研究を開始するにあたって、アクティブラーニングに関して筆者が考えるところを未だ漠然とではあるが、綴っておきたい。

学士課程にアクティブラーニングを採り入れることは、今後、社会で必要とされる能力を育成するためにも不可欠である。誤解を招かないためにあえて述べておくが、旧来の講義型授業、つまり「パッシブラーニング」が不要であると言うのでは決してない。上述した伊藤氏のセミナーでも語られているように、アクティブラーニングが開始されるためには、最初に指導者が行うパッシブラーニングが前提される。しかしながら現代を、そして将来を担うべき人材には単に個別的な知識の蓄積や個人の強調に終始するだけでなく、他者と共に考え、共に活動する能力が求められているのであって、換言すれば、一面的な主体性・主観性で

はなく、間（相互）主体的、間（相互）主観的な人材が求められている。しかしながら、そうした人材を育成するための手掛かりであるアクティブラーニングには、上述したように、一様なしかたで出来上がった方法論が存在するわけではないので、その時々背景に応じて構築していかなければならない。そのため本研究は、アクティブラーニングの先行研究や、先行事例を参照しつつ、本学の実情に相応しいそのあり方を探求しようとする試みである。

その際に私たちが差し当たって道標とすべきものは、本学のライトモチーフではないだろうか。つまり、「面倒見の良い大学」と「入ってから伸びる大学」である。前者に関しては、既に多くの教職員が様々な場面で様々なしかたで実践しているのを著者自身も目の当たりにしている。本共同研究では、後者、すなわち「入ってから伸びる大学」に着目する必要があるように思われる。先に挙げた共愛学園での実践のように、アクティブラーニングの充実は、大学への応募者の増加や応募者の意欲そのものの増加にも影響を与えるようである。本学でもまた、早くからこの理念に従った教育の必要性を説いているのであって、アクティブラーニングが根付くための素地は既に整っているとも言えよう。そのため、入ってから「何が」伸びるのか、「どの程度」伸びたのか、という明示的な資料を蓄積し、個々の学生が大学での学修に際して何を実際に求めているのかを調査する必要性が存するであろう。

ここまで理念的な議論に終始しているようではあるが、時代の要請に適った学士課程教育の実践のためには、そうした理念を具現する方法論の開拓が求められているのであって、本研究はその一歩を踏み出そうとするものに他ならない。

- 3 河合塾編著『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか』東信堂、2011年、5頁。
- 4 河合塾編著『〈深い学び〉につながるアクティブラーニング——全国の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂、2013年、279頁。
- 5 大森昭生氏による共愛学園前橋国際大学での実践は、それとほぼ同様の内容が河合塾編著『〈深い学び〉につながるアクティブラーニング——全国の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂、2013年、247頁以下で報告されているので、更なる委細はそちらを参照されたい。
- 6 8つの教職課程とは、小学校、中学英語、高校英語、中学社会、高校公民、高校地歴、高校情報、高校商業、である。

（さいとう・しん 聖学院大学基礎総合教育部ポスト・ドクター）

1 Kenji Ito, 2013を参照。

2 溝上慎一『アクティブラーニング導入の実践的課題』名古屋高等教育研究第7号、2007年、270頁。